

● シリーズ 私の見た日本 Vol.160

## 私自身への二度目の入り口、日本

Nicolas Giron (ジロン・ニコラ)

フランス・サンテティエンヌ出身。  
2008年Ecole Centrale de Lyon入学、エンジニアリング全般について学び、2012年修了。2010年来日し、慶應義塾大学大学院で振動制御に関する研究を行い、2012年修了。現在、株式会社日建設計の構造設計部勤務。



私が日本に来てからいつの間にか6年が経ちました。日本に興味を持ち始めたきっかけは、漫画です。フランスに住んでいた頃から漫画が好きで、来日した時点では300冊以上持っていたと思います。

私は元々建築学科出身ではなく、数学やエンジニアリング全般について勉強していました。その中でも特に興味を持っていたのは、「振動」の分野です。数学的な知識を用いて物の揺れを想定できるという、言わば数学と力学の組み合わせである点に魅力を感じました。学んだことを活かし、振動の制御に関わるような仕事がしたいと思いました。建物の振動の制御は、人々の命を救うことができると思い、建築へ進もうと決めました。しかし、その考えにはひとつの難点がありました。フランスでは地震に関する研究はあっても、体感することはありません。また、本場にいるとできることの幅が広がると思いました。そこで、地震に関して必要な知識を習得するために、日本の大学へ留学しました。その後、得られた知識を用いて社会に貢献できればと思い、日本で勤め始めました。

ここでは、フランスの中規模な街出身で、建築を学んだことのなかった私が、6年間で感じたことの中から3点について書きます。

フランスと日本で最も大きく違うと感じた点は、時間と美の関係性です。フランスでは、丈夫で長く続く物が美しいとされています。

しかし、日本では災害の影響で突然なくなってしまう可能性があります。加えて、季節の移り変わりも重要視されています。例えば、日本の街並みは、桜、イチョウ、紅葉等、季節を感じられる植物を中心に考えられているものが多いように思います。また、デザインコンペの際には、1年の中で限られた短い時期にもかかわらず、桜の時期か紅葉の時期のパーズが描かれることが多いです。このように、日本では一瞬の美しさをとても大切にしていると感じます。こういったフランスと日本の違いが、それぞれの国の建物の寿命の違いにも関係していると思います。

まず、設計を行う際には、設計条件と優先順位が違います。フランスの場合は、建物は自分の重ささえ支えることができれば、構造的に大きな問題はありませぬ。したがって、石、コンクリートブロック等の組積造の建物が一般的です。これは施工性、断熱性も高いですが、何よりも耐久性が高いです。一方日本では、水平方向の外力（地震・強風）に対する検討は決して欠かせませぬ。そのため、軽量で靱性が高い木造や、大地震で被害を受けてもエネルギーを吸収して倒壊しない、鉄骨造や鉄筋コンクリート造が一般的です。長く使うことよりも、災害に耐えて安全性を確保することの方が重要なのです。

また、そういった災害への対策だけではなく、人々の価値観もかなり異なると感じます。フランスでは、歴史の長い建物に特別な価

値を認める人が多く、古い建物やお城に高いお金を払って住むことがあります。そういった建物での暮らしは不便ですが、それでも魅力を感じる人は多いです。日本でも歴史のある建物は価値が認められていると思いますが、いざ生活するととなると、自分のためにつくられた建物が好まれ、便利さや快適さが優先されることの方が多いと思います。あるオーナーが土地を買った時、既存の建物を壊して、自分の要望どおりの新築の建物をつくるのがよくあります。フランスでは建物とその建物の歴史を買い、日本では土地を買っていると言えるかもしれません。

建物だけでなく、それを取り巻く環境にも発見がありました。私は、世界中の大きな街を見たことはあっても、住むのは初めてでした。東京に住み始めて最初に抱いた強い印象は、街の大きさ、密度、建物の高さです。フランスの人口密度は、日本、特に東京と比較して圧倒的に低いので、狭い土地に工夫して建物を建てる必要はなく、超高層建物は一般的ではありません。東京では人も建物も高密度で、一見「街の圧力」を感じそうですが、意外にもたくさんの公園があり、都会の暮らしに疲れた時に遠くまで逃げる必要はありません。小石川後樂園、六義園、旧芝離宮恩賜庭園に一歩踏み込めば、都会の喧騒から切り離された異世界に入ったようです。超高層建物に囲まれているのに違和感

がなく、とても静かで落ち着いた気持ちになります。そこで、日本における自然に対する特別な姿勢に気づきました。

先述のように、フランスでは人口密度が低いため、意識するまでもなく自然の近くに人が住んでいます。私がフランスに住んでいた頃は、気分転換のためによく近所にあった山や森の中を散歩していました。東京の場合は、人間がある程度自然を制御し、工夫して共生していると感じます。自然を再現する立派な庭園や埋め立て地、超高層を建てるための地盤補強や、地震の被害を減らすための制振や免振の技術開発等が例として挙げられます。

その一方で、東京から離れた時には全く違う印象を受けました。この6年の間、日本全国の様々な土地を旅行しましたが、そこでは街より自然が支配的で、人々は自然に合わせて生活をしていると感じました。大雪に耐えられるように屋根の形状を決めたり、崖の形に合わせて田圃を配置したり、富士山を眺めるために建物の向きや高さ等を考えたり、海から出ている2つの岩をしめ縄で結び、そこに何らかの意味を与える等、ありのままの自然が活かされていると感じました。

このように、人間と自然の立場が逆転するのは、日本が持つ「二面性」という魅力の一つの例だと思えます。日本は、伝統と先端、山と海、街と自然等の極端な二面性を多く持ち合わせていて、これは日本のアイデンティ

ティを支える強い二本柱だと思います。

来日して実感したのは、日本では建築業以外の人も、建築に興味を持っている人が多いということです。日本の街で散歩をしていると、色々な建物の見学ができたり、中に入らなくても建物の概要が丁寧に書いてあったりして、皆の建築に対する関心が本当に高いと感じました。誰でも見える所にわざわざRC造等の構造形式が示されていたり、白川郷に行った時には、伝統的な家の屋根の構成や、雪に対しての考え方などがパンフレットに記載されていたりしたのがとても新鮮でした。

また、日本で本屋に行くと、建築家の本がたくさん置かれていて、安藤忠雄や隈研吾という名前を皆が知っています。フランスでは、一般の人の建築への関心はそこまで高くない、建築家の名前も皆が知っている訳ではありません。私も建築学科出身ではないため、来日する前にはル・コルビュジエしか知らず、ジャン・ヌーヴェルは日本に来てから覚えしました。残念ながら、フランスではル・コルビュジエは冷たいRCの総合住宅を普及させた人という、あまり良くないイメージを抱かれがちです。ですから日本に来て、私がフランス人だと言った瞬間に、日本の学生たちが皆ル・コルビュジエについて話したが、彼のことを非常に尊敬していることに驚きました。この尊敬を示す一つの証拠は、日本の建築学科の学生はフランスの4箇所を絶対に知って

いて、いつか行きたいと思っているか、もしくは行ったことがあります。それはパリ、ル・モン＝サン＝ミシェル、ロンシャンの礼拝堂、ラ・トゥーレット修道院です。

私の実家のすぐ近くにはル・コルビュジエの作品が4つありますが、実を言うと来日するまでに一度も見たことがありませんでした。日本の皆さんの彼に関する熱意のこもった話を聞いて、夏休みに帰国した際、初めて訪れました。そこで彼のコンセプトや、デザインの良さに初めて気が付きました。

来日してから、本当に多くの新しいことを経験しました。日本で不思議なことに出会う時、今まで疑問にも思わなかったことを見つめ直すきっかけになりました。その結果、私自身と私の国に関しても理解が深まりました。これは海外に住んだからということが大きな要因だと思えますが、時間・自然・建築に対する日本固有の価値観も、今の私に辿り着くためにとても重要でした。私にとって、日本への入り口は漫画と地震でしたが、逆に日本は私自身とフランスへの二度目の入り口でした。これからもフランス人としてのアイデンティティを大切にしながら、日本の美德を自分の中に取り入れて、人間的に成長していきたいです。

(執筆補助/三松あずさ)



京都・醍醐寺の桜



皇居から見た丸の内ビル群



富士山



白川郷・五箇山の合掌造り集落



白米千枚田



実家付近のル・コルビュジエの教会